

ISSN2187-3836

Proceedings of the Royal Society, Hakusan

Monograph no.1 (2013)

白山



文武一如

中川 武夫



白山連峰学術院出版

文武一如

中川 武夫

ビシュケク 720024 キルギス共和国 キルギス国立大学
923-1292 能美市旭台1-1 北陸先端科学技術大学院大学
takeo-n@jaist.ac.jp

概要：本論文は、文武両道の士でなければ、文人としても、武人としても大成することができないことを説き明かしたものである。文の根は武であり、武の根は文である。したがって、武を伴わない文が不徹底であるのと同様に、文を伴わない武もまた本物ではない。文武はかくの如くに一つの人格の内において、分離は不可能な状態に渾然融合して一つの如くあってこそ燦然とその輝きを増す一徳である。

1. はじめに

古今東西の偉人・聖人は己の人格の完成が文武の融合によりもたらされたことを自覚していた。そこで、手始めとして、山岡鉄舟(1836~88)を取り上げてこの間の経緯を少しく紐解いて見ることにしよう。山岡鉄舟の場合の文は禅であり、武は剣であった。彼は剣の達人として名高いが、禅無くしてはその剣は単なる人切包丁に過ぎなかった。一方、剣無くしてその禅は単なる知識以上ではなかったはずである。山岡が幕末の江戸城無血開城に果たした役割は、正に剣禅一如を身に着けた明德の大人によってのみ可能な所業であったと言い得る。

ところで、文武が一徳(付録参照)であることを認識し、これを個々の人間が身に着けるように青少年・学生らに奨励する際に大切なポイントは、文として、または武として選ぶ対象は全く、個人の嗜好に任されていることである。たとえば、著者は、文として流れ学を、武としてサッカーを採った。流れ学の奥義を窮めるためにサッカーに打ち込み、サッカーを会得するために流れ学の原理を追い求め続けて今にいたった。このプロセスは、著者の死にいたるまでこれからも断じて続ける所存である。また、著者の尊敬する師・柘植俊一(1932~2003)先生は、文として乱流を、武として、柔道を選ばれた。同氏が個々の乱流粒子を忠実かつ精緻に追跡、記述する画期的な相関方程式、Tsugé-equation を分子運動論に基づいて導くことに成功したことは広く人口に膾炙している (Tsugé1974)。

著者自身のこれまでの人生を振り返る時、かりに流れ学が無ければ、かりにサッカー無ければ、修得し得たものは実に乏しかったはずであるという思いを深くしている。流れ学とサッカーがあたかも車の両輪が如くに相呼応してもつれあいながら、小生を育て、高めて来てくれたのである。ただ、短期的な視点に立てば、流れ学がサッカーを、逆にサッカーが流れ学の進歩を阻害したかのようには思われたこともあったが、人の一生を通しての、家庭、社会、そして国家に対する貢献度を人間力の評価尺度とすれば、文武両道を目指し、これを実践し続けてきた著者の生き方に、一道のみを追求する生き方より、はるかに意義があったと言わなければならない。

本論文の主な目的は、文武を一如、かつ一徳という仮説を検証することである。さらに、偉人、賢人、または、聖人と文武との関係についても、検討を加える。

2. 偉人・聖人と文武

ここでは、無作為に選んだ代表的な国内外の偉人や聖人と文武との関係を概観することとする。

・徳川家康(1542~1616)：徳川 15 代 265 年にわたる太平の世を本邦もたらす礎石を打ちこんだ名将である。東海道一の弓取りとして、武勇に優れたのみならず、古籍、文人に広く学び生涯を通じ自己啓発に努めた。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。